

大都市近郊に 今も息づく 武蔵野の落ち葉堆肥農法

世界農業遺産認定申請書



2021年10月

世界農業遺産への認定申請書

概要情報

農林水産業システムの名称

大都市近郊に今も息づく武蔵野の落ち葉堆肥農法

申請団体

- ・団体名 : 武蔵野の落ち葉堆肥農法世界農業遺産推進協議会
- ・組織構成 : 川越市、所沢市、ふじみ野市、三芳町、いるま野農業協同組合、埼玉県川越農林振興センター、獨協大学名誉教授犬井正、日本土壌協会会長松本聰、筑波大学環境系教授田村憲司

申請地域の位置

- ・申請地域名 : 埼玉県武蔵野地域
(川越市・所沢市・ふじみ野市・三芳町)
- ・申請地域の位置に関する説明
東京都に隣接する東京近郊の農業地域
- ・地理座標 (北緯 35° 49' 53"
東経 139° 30' 8" 農業センター)



主要都市から申請地域までのアクセス

- ・東京駅から川越駅まで電車で 60 分
- ・羽田空港から川越駅までリムジンバスで 100 分

面積

本システム実践農業者耕作地面積 139.79ha、平地林 46.42ha

地形的特徴

関東ローム層に覆われた武蔵野台地が主要な産地となっている。

気候区分

ケッペンの気候区分でCfa (温暖湿潤気候)。四季の変化が明瞭で、夏に高温多湿、冬は低温乾燥。年間平均気温は14.1℃。最も寒い1月の平均気温は3.2℃。年間降水量は1,481mmで、冬期から春先にかけて北西の季節風が強い。

人口 (うち受益者)

人口 : 840,557人 (川越市350,745人、所沢市340,386人、ふじみ野市110,970人、三芳町38,456人)
農業経営体数 : 3,262 (川越市1,964、所沢市860、ふじみ野市204、三芳町234)
本システム実践農業者 : 71軒

主な生計源

サービス業、卸売業・小売業、製造業、農業

農林水産業システムの概要

武蔵野地域の伝統的な農林水産業システムは、栄養分が少なく、水に乏しいなど農業を行うには非常に厳しい自然条件のなかで、屋敷地・畑地・平地林を計画的に配置し、その平地林から生じる落ち葉を堆肥化し、それを畑地にすき込み土壌改良を行うことにより生産性が高い畑地を生みだし、安定的な農作物の栽培を可能とした「落ち葉堆肥農法」である。そして、このシステムが都市近郊でありながら、生態系機能をフル活用した持続的な農業であるということが、世界的にも重要なのである。

本システムの歴史は、1600年代の江戸時代の武蔵野台地の開拓に遡る。武蔵野台地の開拓は、1603年に徳川幕府が本拠を置いた江戸の急速な人口増に伴う食料不足を補うために始められ、開拓農民の個々の土地区画（地割）を屋敷地・畑地・平地林をセットにすることによって地力維持を図るとともに、集落全体で防風・土壌の飛散防止・地下水涵養など複数の機能を持たせ持続的な農業・農村を定着させ、食料需要に応じてきた。システムを現在まで持続してきたことで、本地域は今なお日本の首都東京に野菜を供給する大都市近郊農業地域として、安定的に野菜を供給している。また、地域としてシステムを継続してきたことで、大都市近郊でありながら、屋敷地・畑地・平地林の面的な連なりが残り、そして、この連なりが農地の広がりや緑地帯を生みだし、今も開拓当時の特徴的な姿を維持しているのである。

このように開発圧力の高い大都市近郊において、農地と一体的に人工的に生み出した平地林の落ち葉を活用するという江戸時代の新田開拓における伝統的な農法が、地域という広がりをもって今なお残っている点や四季の変化が明瞭な温暖湿潤気候の日本において、気温差により生じる落ち葉を活用して育まれた農法である点、さらに畑地の地力維持において、世界的にみると本地域と対照的に家畜から得られる厩肥に強く依存している地域がある点を鑑みても、他に事例は見当たらず、本地域は世界的にも稀有な地域であるといえる。

【システムが生み出す申請地域固有の特徴】

システムにより、現在でも開拓当時の広い畑地において、多種多様な農産物が生産され、市場に出荷されている。またシステムにより生産された農産物は加工もされており、他産業との連携のなかで、関連産業への広がりも有している。システムを維持するために毎年行われている平地林の落ち葉掃きなどの林床管理や落ち葉の堆肥化は、豊かな春植物を生み出すとともに、多様な鳥類や昆虫の生息の場を生みだし、さらには多様な土壌微生物も生み出している。このようにシステムの循環が、豊富な生物多様性を生み出している。システムを支え、持続可能なものとしているは、地域の伝統的な文化、価値観及び社会組織だけではない。本地域においては、大都市近郊を活かした都市住民との交流を行う現代的な社会組織も存在している。システムが生み出す屋敷地・畑地・平地林がセットになったランドスケープは、日本の首都東京から30 km圏内の大都市近郊にありながら今なお残っている。大都市近郊ゆえに強い開発圧力とも共存のための取り組みや工夫がなされながら、システムのランドスケープが維持されている。

【申請地域の世界的な重要性】

システムは「低炭素社会」「環境保全型社会」「自然共生社会」を実現し、国連の持続可能な開発目標（SDGs）にも貢献している。また、本システムが家族労働により行われており「国連家族農業の10年」などの国際的取り組みとも一致している。本システムの世界的な重要性を示す証左として、本地域が発展途上国から先進国まで、幅広く海外からの視察を受け入れてこととともに、本システムが南米チリの日本国際協力機関（JICA）を通じて現代の砂漠化対策や環境保全に活かされていることがあげられる。このように本システムは、世界的な課題や世界の都市近郊における農業のモデルとなり得る知恵や工夫が詰まっており、伝統的かつ先進的なモデルとして世界に貢献する最重要地域である。

ランドスケープ

大都市近郊に今も残る
平地林・畑・屋敷を組み合わせた
短冊型の地割り



農業生物多様性

農産物の多様性
希少種の維持・保存
平地林の生物多様性
発達した団粒構造と菌類・微生物



文化、価値観 社会組織

代参講・歳時記・郷土芸能
多様な主体の参加



一軒の地割り約5ha

平地林
約2ha

畑地
約2.5ha

屋敷地
約0.5ha

堆肥化された落ち葉

平地林の落ち葉

伝統的な知識システム

厳しい自然条件を克服
安定的な農作物の生産



都市住民による
落ち葉掃き

食料及び生計の保障

多品種多品目の露地野菜を
生産する一大産地
落ち葉堆肥の恵みを受けた野菜



都市への
食料供給

首都東京から
30km圏内
大都市近郊の
農業遺産

大都市東京